艶隠者

えんのいんじゃ

小説　石川丈山

中薗英助

新潮社

艶隠者

小説　石川丈山

中薗英助

新潮社

艶隠者（えんのいんじや）——小説（しようせつ）石川丈山（いしかわじようざん）

一九九八年三月三〇日　発行

著　者　中薗英助（なかぞのえいすけ）
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（03）三二六六—五四一一
　　読者係（03）三二六六—五一一一
郵便番号一六二—八七一一
振替　〇〇一四〇—五—八〇八
印刷所／大日本印刷株式会社
製本所／株式会社大進堂
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

© Eisuke Nakazono 1998, Printed in Japan
ISBN4-10-339602-4　C0093

艶隠者——小説

石川丈山

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

装画　狩野探幽筆『丈山寿像』（部分）
（詩仙堂所蔵。撮影・水野克比古）
装幀　新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

元和二年極月。

徳川家康に朱子学を進講し、江戸幕府初代のお側付き儒官となった林羅山は、のちに丈山と号した石川嘉右衛門重之に宛てた長文の書簡の冒頭にこう書いている。

凡ソ男子ノ世ニ在ル也其レ何如ゾ哉。玉鞍白馬、春ヲ度リ花ヲ蹈ミ、酒肆ニ入リ伎倡ヲ携エ、睚眦盻睞、閭里ニ夸リ耀スハ、是レ少年ノ態ナリ。

男子、ひとたび一人前となって世に立つとき、どうするか。宝玉で飾りたてた鞍おいた白馬にまたがり、春風の中を疾駆し、花びらを踏んで酒場に入って妓女と戯れ、眼を剝いて辺りを睥睨しては、村里でおのれの若さを誇らかに自慢している。これぞ、少年の生態だというのである。

この文章が、長安の遊侠の若者を詠んだ李白の華麗な歌謡風の楽府と呼ぶ七絶「少年行」を、ほとんどそのまま援用していることは明らかである。「少年行」の第二、第三句はまさ

に――銀鞍白馬、春風を度る。落花踏み尽くして、何れの処にか遊ぶ――である。

羅山は、若者の生態から出発した筆を、次には戦場における勇士の生きかた、さらに天下を争う王侯の志へと及ぼしてゆく。そうして筆を一転させて、真の男子はどのように生きる者かを次々と問いただそうとする。

風蕭々として易水寒しと歌った、あの燕の刺客荊軻。乗馬の鞍の間に詩稿を認めて秘めたという魏の曹操。戈を枕にして文章を綴ったという東晋の劉琨。何れも勇猛な武将であるだけでなく、詩文を草したことで有名である。

だが、中年に及んでこれまでの武人としての節を折り、行を改めて文士詩人となり、或いは仏道の世界に身を隠したというような人もいることを、羅山は知っているという。そうした史上の実例を次々とあげて、話を二転三転させたあとで、ついに書簡を宛てた丈山その人に筆をうつしている。

山材久シク幕下ニ仕エ、具臣ニ列ス。昨ノ日、膝下ノ蒲ニ座シ、心頭鉄ヲ削ル。又好ンデ詩ヲ吟ジ、句ヲ連ネ、艶簡ノ情詞、青年ノ風流ヲ増ス者ノ少ナカラズト爾云ウ。乙卯ノ役、我ガ軍ハ大坂ヲ征ス。山材モ来銃ヲ避ケズ、忽チ先鋒ヲ抽ク。人僉首級ノ労ヲ知ル矣。而モ其ノ功ヲ言ワズシ而出ズ。晋ノ明君独リ介子推ヲ忘ルル者、何ゾ哉。

山材とは、丈山自身が山木とともに、自らを荘子風の無用の哲学を加味して呼び習わした

別号。羅山はその雅号に対応して、何ら功なき家康の家臣と呼びすてておいて、じつはまことに感心なことに、丈山が暇さえあれば座りづめで真剣に書を読み、精神をとぎすました人としている。また好んで詩篇を吟誦し、自らも作詩する。艶やかな文書に綴られた詩情豊かな文章は、青年の芸術的な風流心をふるい立たせたのではなかろうか、としている。

羅山は、詩人としての丈山を、ひとまずこう讃えておいてから、じつは丈山には武人としての大きな功績があったのだとうち明ける。人に忘れられたその功績こそは、大坂夏の陣にあったというのである。

乙卯の役こそは、いうまでもなく大坂夏の陣である。その夏の陣に出陣した丈山を、春秋時代の晋の文公の家臣、介子推になぞらえた書信である。

介子推というのは文公に従い、十九年間というもの亡命し、諸国を流浪した忠臣だ。戦乱をおさめ、平和を取りもどした国へ帰還したとき、子推は文公からの恩賞を求めようとしなかった。天がまさに晋君を守られたのに、恩賞など求める臣下の邪道を許されるとは解せない、と。

禄を食むことを拒否した子推は、母とともに緜山に隠れた。山西省沁源県と介休県とにまたがり、緜水の源になっている山だ。文公が子推を呼びもどそうとして山に火を放ったところ、子推は帰らず、焼けた山中に木を抱いたまま二人は焼け死んだ。文公は山を封じて介山と称したという。

家康は晋の文公、丈山は子推にたとえられている。子推が十九年間、文公に忠節を尽した

ように、丈山も十六歳から十七年間、家康に近侍として仕えた。御納戸役ではあるが、とりわけ武芸に秀でていただけでなく、そよとの葉ずれや物の気配にも目覚めて寝所を守る敏捷さと剛勇とで長年にわたり宿直(とのい)を勤めるなど、家康からことのほか寵愛されていた。

先陣を切って敵将の首級を挙げたのは誰知らぬ者もないのに、家康ともあろう明君が、丈山にだけ恩賞を忘れるとは何事ぞと、羅山は介子推の故事をうまく利用して、ひそかに非難しているようである。いや、そうではなくて、丈山が自らの手柄を主張することのなかったのはなぜか。むしろ、恩賞のないことを奇貨として幕下を離れ去ろうとしていたのではないかと、その間の機微を問いかけているようでもある。ことはそもそも、大坂夏の陣で家康が、幕下の攻め手に対して先登の禁令、すなわち勝ち戦を信じて将士の損亡を減ずるために、一番乗りの功名争いを禁じたことにも発していたのだが、いまここではそれを問うまい。

何れにしろ、丈山は子推のように山に籠って焼死することはなかった。山に籠りはしたものの、武をすて、文に生きる漢詩人となって再生したのであったから。

第一章

1

大坂夏の陣は、羅山が石川嘉右衛門重之に宛てて、書状を寄せたときより一年半も前のことである。

慶長二十年春というから一六一五年の四月四日、徳川家康は軍勢をととのえて、駿府城から出陣している。

重之は、大坂への出立にさきだち、かねてから参禅し、薫陶をうけていた興津（おきつ）の臨済宗清見寺へ説心和尚を訪ねて暇乞いをした。三月下旬のことである。すでに境内の梅は散り、桜も満開をすぎていた。

その日、巨鼇（きょごう）山清見興国禅寺の修行僧慈信は、てんてこ舞いをする一日をすごした。駿府城から興津までは四里少々である。いつもは、御夜詰の不寝番明けにやってきて参禅する重之が、珍らしくも昼日中、凜々しい騎乗姿でやってきた。慈信は説心和尚に命ぜられて、つ

きっきりで世話を焼かなければならなかったのである。

慈信はいわゆる沙弥から菩薩戒をうけて、一人前の修行者になったとはいえ、まだ十六歳の少年僧にすぎない。

「よう手足も背ものびておるな。私も元服して出仕したのは、同じ十六歳のときだったが」

重之にいつかしげしげと見つめられ、濃い眉尻を下げて顔を赤くした慈信は、坊主頭に手をやりながらも、心がはずむように嬉しかったことを覚えている。

だが、その日はなぜか今生の別れのように、人が変って見えた。出陣のうわさは知っていたが、できるかぎり平常心で見送らなければならぬと思いきめていた。

清見寺は、前庭に白い波のくだける清見潟と駿河湾、背後に伸び上った裏山からはるかな富士山の前山へと連なる山波をひかえ、かつては蝦夷に備えた清見関という関所のあった要衝である。

それより十数年を経た寛永年間、説心和尚の後継者であり、ともに和尚に学んだ兄弟子の大梁宗欣禅師に宛てた書信の中で、丈山は清見寺での交わりを次のように述懐している。

夫レ河陽満県ノ花、美保茂林ノ松、田子長江ノ月、富士半空ノ雪、挙ゲテ目前ニ在リ。是レ皆曩時和尚ト偕ニ、童男ヲ携エ、酒榼ヲ提ゲ、嘯傲ノ其ノ間ニ吟弄スル者、蓋シ戯レ有ラン也。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

丈山はこの書信とは別に、清見寺での交わりを回想する文章も残している。

昔者花ヲ河陽ニ観、雪ヲ鰲峯ニ咏メ、禅師ト支許ガ交リヲ締ブコト尚シ矣。一別ノ飛蛍既ニ一章ヲ逾ウ。其ノ間ヲ電過スルコト、恍然トシテ夢ノ覚ガ如シ。浮景ノ流レ易キコトヲ感ジ、良晤ノ得難キコトヲ悵ム。

何れも同じ懐かしい想いを、周辺の佳景と和尚の人柄とを渾然一体と詠みこんだ詩情豊かな漢文に託して綴ったのだ。駿河国は河陽の花、三保の松原の松、田子の浦の月、富士山の中空に浮かんだ雪と、すべて極め付の絶景ならざるはないお膳立てのととのった土地柄を舞台に、説心和尚や大梁禅師と酒桶の酒をくみかわし、およそ拘束のないのびのびとした心で詩歌を吟誦したものである。支許の交わりとは、舜帝が天下を譲ろうとしたのに対し、ともにそれを恥じて固辞した支伯と許由のように、無欲てんたんな幾歳月の交わりをふりかえって、夢のような恍惚たる思い出にひたったが、もはや容易に再会のかなわぬことが恨めしいというのである。

それを風雅な文人の交わりと呼べるかどうか、当時の慈信はまだ知らない。だが、その日、大方丈で対座して向いあった二人の姿からは、そんな悠長な風情はみじんも感じられなかった。慈信は、重之がすでに禅の悟りを開き、師の説心から僧としての印可、袈裟をあたえられていることを知っていた。ともに相投じた投機の偈にいわく。

瓶裡ノ梅花　枕上ノ剣

むろん、慈信には何のことだか分らず、ただ梅の花びらと白刃とが、眼前に奇しき幻の如く交叉したまま静止して、一幅の絵画となる。そんな奇跡を空想し得ただけである。

いったい、我が師は何といって重之を送り出すだろうか。慈信は自らの胸の動悸の異様に高まる音を聴きながら、方丈のうす暗い片隅にひかえて、二人を見守っているばかりだった。

だが、寺の境内に名残りを惜しむ重之の背後にしたがって歩むとき、慈信にはそんな畏れは生じなかった。とりわけ、裏山からなだれ落ちる滝の水を集める馬蹄形の池のまわりに、よく光る砂利を集めて盛った銀砂灘を中心に築庭された家康愛好の庭を眺める重之の視線は、いつも通りに穏やかだった。駿府城から移された睡虎石、遊亀石、臥牛石などの奇石が春陽にぬくめられているのを、まるで点検するように一つ一つ数えたてたりもした。

「嘉右衛門さまは、上方へ参られてお庭作りなどなさるのでございますか」

慈信はふと、日頃に似ないそんな軽口までたたいたほどである。

「庭作りか。やって見たいものだなぁ」

大真面目にうけ応えた重之の眼は、細くなっていた。

慈信はほっとした。軽口をたたいたものの、内心首をすくめて兢々としていたのだ。ふだんは生真面目で学問好きの静かな人だが、怒ると癇癖の強い人だと囁かれていたからだ。

駿府城に近く、家康の手厚い保護のある清見寺には、城内のさまざまな内密の噂が伝わってきていた。大奥には、夫人の部屋とは別に家康の寝所も用意されているが、その中心部に

連なって奥女中たちの居室である艶かしい長局もあると聞いた。なかでも、御夜詰の不寝番に任ずる近習と、お廊下でたびたびすれちがう奥女中の一人が、雪洞のあかりに映る凜々しい侍姿に想いをかけ、懸想文をつけたという話があった。文面にはあなたさまがお風邪気味とお察し申します故、特効のあるおくすりお手渡ししたく、お物置の渡り廊下にてお待ち申し上げます、と。

「奥女中は大奥でも五本の指に入る美しい才女でな。もうずいぶん以前の話だが、お近侍どのが、ただそれ一度会うただけ、などとは信ぜられぬことじゃなかろうか」

まだつづきがあるという心得顔のまま、ふいに沈黙したのは、先輩の修行僧開玄だった。

凡そ大法を成就せんには、唯だ身心堅固にして之れを能くすべし。開玄はもぐもぐとそう唱えながら合掌して、庫裡の廊下を通りすがった説心和尚に一礼した。

御納戸役の名を告げようとして口をつぐんだのは、和尚の達磨絵のような大きな眼が怖わかっただけではない。もし、表立って口にしたことが、和尚のすぐ背後にいて衆僧の頂点に立つ宗欣首座の耳に入り、当の石川嘉右衛門に知れたら、一刀の下に斬り殺されるのではないかという恐怖心が働いたからである。開玄のいおうとしていることは、少年僧の慈信にも察知できないことはなかった。元服して出仕すればもはや妻帯という武士の世界で、重之が三十をすぎて五百石取りの旗本になる今日までそうしないのは、何故かという不思議を想わないではなかったからだ。参禅し、禅僧としての印可を得たからには、身の清浄を保ち女色を近づけないのが、当然といえばいえる。

いや、ことは逆さであって、天下取りの家康どのの信頼篤きお旗本で、何れは一国の武将にもすえられようお方がそうするからには、何かわけがなければならない。開玄の思考はそこまでで、停止してしまうのだった。

2

大方丈に向いあった説心和尚と重之は、長い間、一ときというから二時間あまり、一言も発しなかった。

慈信は石川嘉右衛門の、衣紋竿を入れたように武張った肩幅を見つめたままだった。武芸で鍛え抜かれた長身だった。肩衣のかわりに掛絡（からら）という禅僧が身に着ける前掛けをまとっているのが、不気味なくらい似合っている。沈黙の中にいることは、慈信にとってさして苦ではない。禅堂、食堂、浴室は三黙堂と教えられたが、どこにいても音一つたてないことが要求されているからだ。

だが、嘉右衛門重之の背中は、さまざまなことを、きりもなく語りかけてくるようで、息苦しかった。耐えかねて、席を立とうとしたこともある。槍は津藩の内海左門の高弟、柔術は福野七郎右衛門、砲術は稲富流始祖の稲富一夢、馬術は大坪流とそれぞれ当代の隠れもない名手に学んだという。とりわけ槍術の達人となったのには、それ相応のわけがある。石川一門は代々、徳川家を開く松平氏に仕えながら、父信定が駿河の田中城攻めのさい、敵に左

股を刺された槍傷がもとで、勇猛を誇る三河武士としての勤めを全うできなくなって、挫折したのを目のあたりにして心に深く期するところがあったのだ。一方、家康の重臣となった本多佐渡守正信の姪にあたる母からは、槍一筋の武門の再興をきびしく語り聞かされ、十三歳にして家出して仕官する道を歩み通したのである。慈信の視線の向うには、すべてを放下して禅道に生きることのできない、一枚岩のような重之の背中があった。

ついに耐えられず、厠へ立ってから、また方丈の片隅にそっとすべりこんできても、雪隠の窓から見てきたばかりの裏山のように重之のうしろ姿は微動だもしていなかった。嘉右衛門重之の我慢強さをつたえる昔話も、開玄からいくつか聞かされて知っている。関ヶ原合戦ののち、家康がなお伏見に布陣していたさい、荒んだ戦陣の気風の中で近習仲間の近藤平右衛門が人と争って手傷を負い、命も危なくなっていた。それを、二十一日間というもの、一歩も離れず付きっきりで看病した。看病する側も、死なばもろともというほどの荒行であった。

そうかと思うと、それから六、七年後の慶長十二年、駿府城の火災のさいには、家康の第十一子でのちに水戸初代藩主となる頼房が、乳母に抱かれたまま猛火の中で泣き叫んでいたのを飛びこんで助け出した。とっさに、奥女中の緋色の被き物を奪い取るなり、水を頭からかぶって飛びこんだという、さながら歌舞伎劇の熱した荒事でも観るような花やかな騒ぎだった。我慢強さが、時いたるや一瞬、また数瞬にしてことを決する瞬発の行動力に変る。それが嘉右衛門重之という男の男たる真骨頂ではないか。噂は噂を生んで、寺僧たちの間でつ

いにそう讃嘆されたものである。

慈信はなぜか、それだけではないという風に考えていた。むろん、考えをつきつめることはできなかった。いや、つねに周囲の人々からそう見られていることの正反対に、嘉右衛門どのは繊細な心の持主であるはずだ、と。これも寺僧たちの間で禁句になっていたが、駿府城の本丸に手燭の不始末で、二度目の失火騒ぎが起こったとき、処分された四人のうち流刑になった一人があの噂の奥女中だったため、嘉右衛門はそれ以後まったく女性を絶ち、近づけなくなったという。その真偽を知っているのは、恐らくいま対座して、一語も発せずにいる説心和尚ただ一人だろう、と。

説心が素隠と号する当代稀れな博覧強記の学者であったことは、むかしもいまもよく知られていないようである。わが国で最初に木版印刷されて普及し始めた漢詩集は、いうまでもなく『三体詩』である。のちに流行する『唐詩選』が、唐代前半の初唐盛唐の詩に重きをおいているとすれば、『三体詩』は後半の中唐晩唐の作品を多く集めていた。室町時代以後、京都のいわゆる五山官寺の五山版として出版され、読者層も初めは宮廷貴族にかぎられていた。これに対して、一般庶民にも解放された林下の禅に属する妙心寺派から出た素隠の『三体詩抄』によって元和八年に発行された講義録は、ときに風狂、ときに真摯な平談俗語をまじえながら、時世に照らす生き方を探って綴られる独特なものだった。

興津の清見寺にやってきたのは、慶長十年以前とされている。その間に、沼津の大聖寺を興す手伝いをしたあと、清見寺住職の大輝和尚の法灯を継いだのが慶長十四年。ついで、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com